



第3号 戦時の「制服」もんぺ

△ピース・シーズ▽
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、小学6年から高校3年までの44人が、自らテーマを考え、取材し、執筆していきます。

太平洋戦争中、女性の衣料の定番はもんぺでした。戦時体制の中、国の統制、推奨によって広がりました。物資を節約し、国民の心を束ねる狙いもあったとみられます。
1942(昭和17)年ごろから、女子学生はそれまでの制服のスカートをもんぺにはき替えて登校しなぞです。生徒動員の勤務奉仕や建物疎開作業にも、もんぺ姿で従事しました。
機能的で動きやすかったのは確かでしょう。でもそれは、自由を制限された戦時の「制服」でした。45(昭和20)年に原爆が投下されたときも、女子学生をはじめ、多くの女性はもんぺをはいていたといえます。

今回、広島ファッション専門学校(広島市中区)の協力を得て、私たちが実際にもんぺを作ってみました。今の私たちと同じ年頃だった当時の女子学生の思いを想像し、もんぺがスタンダードだった時代の背景を探りました。

おしゃれの自由 なかった



私は好きな服を選び
好きな時に着る
いかに便利さの中で
生活しているのか

もんぺはゆったりして動きやすいなと感じました。でも戦時は、普段着も外出着も労働着も、全て同じもんぺが当たり前だったといえます。上はセーラー服や、目立たぬ色に染めたシャツという格好で、洗濯も週に1回が普通だったそうです。
ほとんどの物資が配給制だった当時の女子学生たちには、おしゃれを楽しむ余裕などありませんでした。今、私は自分で好きな服を選び、好きな時に着ることが出来ます。同じ服を一日中、さらに1週間着続けるなんて想像もできません。
作るのも、ミシンを使わず全て手縫いすることに驚きました。今回はみんなで協力して仕上げましたが、当時は多くの場合、母親が1人で作っていたと聞きました。
私たちがいかに便利さの中で生活しているのか気がつかれました。今の幸せに感謝し、何もかも人や機械任せではなく、自分でできることは自分自身で解決していける人になりたいです。(中3芳本菜子)

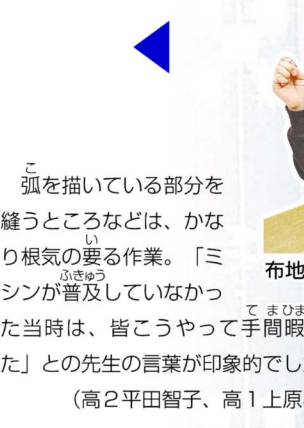
もんぺ作りスタート

- 1 布地4枚を用意します。布地の柄は紺色の縞の木綿です
- 2 型紙を布地に重ねてピン留めし、縫いしろを考慮して数センチ外側に裁断の目印の線を入れます
- 3



布地がずれるなど大変でした。愛着が湧くと思う一方で、裁縫の苦勞がしのばれました。(高1岩田壮)

次は縫い合わせ



布地を2枚重ねて縫い合わせていきます

弧を描いている部分を縫うところなどは、かなり根気の要る作業。「ミシンが普及していなかった当時は、皆こうやって手間暇かけていた」との先生の言葉が印象的でした。(高2平田智子、高1上原あゆみ)

ゴム入れへ



どうも 胴回りと足首部分にゴムを通す輪を作るため、それぞれ1.5センチくらい折り返してぐるっと1周縫います。腰の位置には住所と名前を書いた名札を縫いつけます



それぞれにゴムを通します

ゴム通しの輪作りは、縫うことより、まち針での仮留めなどに手間取りました。ゴムを通すのもなかなか進みませんでした。昔の人は上手だったのだなと思いました。(高1佐伯雛子、中1谷魁人)

完成

「あの日 名前の手がかり」

広島ファッション専門学校校長 戸谷清子さん



広島ファッション専門学校の戸谷清子校長(85)は女学校時代のもんぺの記憶を次のように話します。

1942年に広島県立広島第二高等女学校に入学したときは、プリーツスカートの制服でした。戦時色の深まりとともにスカートはもんぺに替わりました。4年生になった45年、授業は週1日だけ。日曜を除くとその5日は生徒動員で、今の広島市南区皆実町にあった広島地方専売局に通い、たばこ製造の作業に携わりました。
国防色といわれたからし色の支給の上着に、下は母が作ってくれたもんぺでした。
その年の8月6日、作業が始まって少したった午前8時15分、原爆が落とされました。ピカッと視界が一瞬真っ白になり、窓の外に燃え盛る炎のよう
な色が見えました。工場が爆発した?と思うと同時に強烈な爆風。私の体は機械の間に吹き飛ばされました。手にけがはしたものの、幸い軽傷でした。
雑魚場町(現中区国泰寺町)で建物疎開作業をしていた2年生はみんなひどいやけどを負い、多くが亡くなりました。腫れ上がった顔、ただれた皮膚。救護を手伝いましたが、誰が誰なのか見分けがつかせませんでした。
役立ったのがもんぺでした。柄や、腰の名札の住所と名前が判断材料になりました。まさかこんな形でもんぺが……。今考えれば涙が出る、悲しい思い出です。(聞き手・中3溝上希)

「着ないと異端視された」

大学非常勤講師(服飾史) 津島由里子さん



戦時中どうしてももんぺを着なくては行けなかったのでしょうか。安田女子大などで非常勤講師を務める津島由里子さん(67)「服飾史」に聞きました。
もんぺは、野良着を原形に、戦時の女性の「制服」として奨励されたそうです。
明治、大正時代は、女性の服は着物や袴が中心でした。それが、戦時色の深まりとともに質素な服に移ります。1940年の大日本帝国国民服令で男子の標準服「国民服」が登場。42年、厚生省公示で女子の非常時活動着の一つとして「上衣ともんぺ」の着用が促され、広がりました。「文字通りのお仕着せだった」と津島さんは言います。
男子の国民服はワールや木綿製。足にはケートルを巻きま
した女性たちは、戦時の物資の乏しい中、木綿などの着物をほとんどもんぺを作りました。上着もさきやかなおしゃれとしてたもとを残したまま袖にしていた人もいたそうですが、やがては切り落として筒袖にしなければなりません。
もんぺは戦意高揚の「決戦衣服」とも呼ばれました。内心は「かっこ悪い」「着たくない」という思いがあっても、着ていないと周囲から異端の目で見られる。そんな時代の風潮もあつたそうです。自由が制限された時代の制服でした。(高1轟岡舞子、小6黒美貴)